

わが国企業の行動は、いつ、どのように、変わったか？*

社会学部 摂南大学経営情報学部 立命館大学経済学部
道明 義弘・伊藤 研一・井澤 裕司

1. はじめに

わが国企業の行動は、変わってきているといわれている。それでは、いつ頃から、どの行動が、どのように変わってきているのであろうか。具体的なデータによって確認していく作業が必要であろう。わが国企業の行動を長期的に分析しようとするとき、この変化をどのようにとらえていくかが一つの課題となる。行動が変化している時点を見つけ出すことができれば、行動分析は、より適合的なものになると期待できる。分析期間をどのように区別するかによって、結果が異なることになる。この問題を解決するための一助として、本稿では、集計データを用いて、わが国企業における行動の変化を探っておきたい。これは、パネル・データによる分析のための基礎的な情報を提供することになるであろう。本稿では、わが国企業の行動について、次の6つの側面から、その変化を探っていく。1. 利益を生じている会社と損失を発生している会社の会社数を集計することによって、上場会社と新興市場会社について、全体としての会社の利益獲得能力を調べる。2. 各種利益額を集計し、それぞれの利益の獲得方策を調べる。3. 利益の獲得能力の分析から、資金調達方法の変化を探る。4. 資産と売上高の変化から、投資とその回収行動およびその行動の効率について調べる。5. 設備投資と設備廃棄のあり方を、有形固定資産の変化から探る。モノのリストラがいつ、どの程度、生じているのか。6. 従業員数の変化を探る。ヒトのリストラが、いつ、どの程度であるか。ヒトとモノのリストラは、どちらが先に発生しているか

本稿では、2004年3月決算までの期間について、日本政策投資銀行が提供している「企業財務データバンク」の個別決算、財務情報データ（上場企業については正規化あり、新興市場企業については、正規化なし）により、上場企業については、1980年～2004年、新興市場企業については、1987年～2004年、集計したデータを用いる。本稿で取り上げる集計対象グループは、上場会社収録継続全社、収録継続一部市場上場会社、収録継続二部市場上場会社、製造業上場会社収録継続全社、製造業収録継続一部市場上場会社、製造業収録継続二部市場上場会社、非製造業上場会社収録継続全社、非製造業収録継続一部市場上場会社、非製造業収録継続二部市場上場会社、新興市場収録継続全社、新興市場製造業収録継続会社、新興市場非製造業収録継続会社の12区分である。それぞれについて、収録会社数と、営業損益、経常損益、税引後当期純損益について、利益を生じている会社数と損失を発生している会社数を集計した。また、対象グループごとに集計した項目のうち、有

形固定資産、資産合計、資本合計、売上高、営業損益、事業損益（＝営業利益＋営業外収益）、経常損益、税引後当期純損益、従業員数、という9項目について、本稿では利用している¹⁾。

2. 利益を生じている会社と損失を発生している会社

営業損益、経常損益、税引後当期純損益について、それぞれに、利益を生じている会社と損失を発生している会社の会社数を集計した。その結果が、下記の表である。紙幅の制約上、収録継続全社、製造業収録継続全社、非製造業収録継続全社の3グループについてだけ示しておく。まず、上場会社について。

表1 上場会社 収録継続全社の各種利益・損失 会社数

年	非収録 会社数	営業利益 会社数	営業利益 比率	営業損失 会社数	営業損失 比率	経常利益 会社数	経常利益 比率	経常損失 会社数	経常損失 比率	税引後 当期純 利益 会社数	税引後 当期純 利益 比率	税引後 当期純 損失 会社数	税引後 当期純 損失 比率
1980	1273	1235	0.9701	38	0.0299	1190	0.9318	83	0.0652	1213	0.9529	60	0.0171
1981	1295	1217	0.9629	18	0.0371	1178	0.9097	117	0.0903	1205	0.9305	90	0.0695
1982	1317	1259	0.9560	58	0.0440	1185	0.8998	132	0.1002	1211	0.9218	103	0.0782
1983	1337	1253	0.9372	83	0.0621	1169	0.8713	168	0.1257	1201	0.8983	135	0.1010
1984	1361	1293	0.9500	68	0.0500	1231	0.9067	127	0.0933	1256	0.9229	105	0.0771
1985	1379	1321	0.9579	58	0.0421	1285	0.9318	91	0.0682	1310	0.9500	69	0.0500
1986	1389	1307	0.9410	82	0.0590	1282	0.9230	107	0.0770	1291	0.9291	98	0.0706
1987	1372	1215	0.9071	127	0.0926	1212	0.9052	129	0.0910	1271	0.9286	98	0.0711
1988	1143	1371	0.9522	69	0.0478	1373	0.9515	70	0.0485	1373	0.9515	70	0.0485
1989	1519	1507	0.9729	12	0.0271	1517	0.9793	32	0.0207	1515	0.9781	31	0.0219
1990	1631	1592	0.9761	38	0.0233	1598	0.9798	33	0.0202	1608	0.9859	23	0.0141
1991	1672	1629	0.9743	13	0.0257	1616	0.9665	56	0.0335	1622	0.9701	50	0.0299
1992	1706	1638	0.9601	67	0.0393	1611	0.9461	92	0.0539	1600	0.9379	106	0.0621
1993	1770	1595	0.9011	171	0.0983	1561	0.8819	209	0.1181	1511	0.8706	229	0.1291
1994	1831	1581	0.8651	217	0.1319	1561	0.8525	270	0.1475	1518	0.8151	283	0.1516
1995	1917	1721	0.8978	196	0.1022	1696	0.8817	221	0.1153	1661	0.8665	255	0.1330
1996	1977	1796	0.9081	181	0.0916	1808	0.9115	169	0.0855	1771	0.8973	203	0.1027
1997	2027	1890	0.9321	137	0.0676	1887	0.9309	139	0.0686	1835	0.9053	191	0.0912
1998	2092	1911	0.9135	181	0.0865	1900	0.9082	192	0.0918	1800	0.8601	292	0.1396
1999	2145	1838	0.8569	307	0.1431	1836	0.8559	309	0.1411	1680	0.7832	165	0.2168
2000	2211	1993	0.9011	218	0.0986	2009	0.9086	202	0.0911	1775	0.8028	136	0.1972
2001	2260	2075	0.9181	185	0.0819	2087	0.9235	173	0.0765	1718	0.7602	512	0.2398
2002	2287	1913	0.8366	311	0.1501	1970	0.8611	317	0.1386	1616	0.7066	671	0.2931
2003	2312	2079	0.8992	233	0.1008	2082	0.9005	230	0.0995	1800	0.7785	512	0.2215
2004	1992	1852	0.9297	140	0.0703	1858	0.9327	134	0.0673	1760	0.8835	232	0.1165

表2 上場会社 製造業収録継続全社の各種利益・損失 会社数

年	兼続収録 会社数	営業利益 会社数	営業利益 比率	営業損失 会社数	営業損失 比率	経常利益 会社数	経常利益 比率	経常損失 会社数	経常損失 比率	税引後 当期純利益 会社数	税引後 当期純利益 比率	税引後 当期純損失 会社数	税引後 当期純損失 比率
1980	875	817	0.9680	28	0.0320	819	0.9360	56	0.0640	831	0.9531	41	0.0469
1981	885	811	0.9537	11	0.0163	789	0.8915	96	0.1085	809	0.9141	76	0.0859
1982	899	853	0.9488	16	0.0512	787	0.8751	112	0.1246	813	0.9043	86	0.0957
1983	909	818	0.9329	60	0.0660	779	0.8570	130	0.1430	805	0.8856	103	0.1133
1984	921	871	0.9457	50	0.0543	820	0.8903	101	0.1097	839	0.9110	82	0.0890
1985	932	887	0.9517	15	0.0183	858	0.9206	71	0.0791	877	0.9410	55	0.0590
1986	924	857	0.9275	67	0.0725	835	0.9037	89	0.0963	845	0.9145	79	0.0855
1987	897	789	0.8796	108	0.1204	786	0.8763	110	0.1226	811	0.9041	86	0.0959
1988	934	876	0.9379	58	0.0621	879	0.9411	55	0.0589	881	0.9433	53	0.0567
1989	993	959	0.9658	34	0.0342	967	0.9738	26	0.0262	970	0.9768	23	0.0232
1990	1028	991	0.9669	33	0.0321	1001	0.9737	27	0.0263	1010	0.9825	18	0.0175
1991	1053	1017	0.9658	36	0.0342	1006	0.9554	47	0.0446	1011	0.9630	39	0.0370
1992	1061	1012	0.9511	52	0.0489	996	0.9361	68	0.0639	983	0.9239	81	0.0761
1993	1095	957	0.8740	137	0.1251	930	0.8493	165	0.1507	916	0.8365	179	0.1635
1994	1110	916	0.8252	194	0.1748	900	0.8108	210	0.1892	891	0.8051	216	0.1946
1995	1111	998	0.8974	116	0.1046	981	0.8801	160	0.1439	961	0.8627	179	0.1605
1996	1168	1029	0.8810	139	0.1190	1013	0.8630	125	0.1070	1027	0.8793	141	0.1207
1997	1186	1093	0.9216	93	0.0784	1089	0.9182	96	0.0809	1073	0.9047	112	0.0944
1998	1208	1093	0.9018	115	0.0952	1081	0.8947	127	0.1052	1040	0.8609	168	0.1391
1999	1222	977	0.7995	245	0.2005	977	0.7995	245	0.2005	892	0.7300	330	0.2700
2000	1211	1075	0.8862	166	0.1338	1090	0.8783	151	0.1247	955	0.7695	286	0.2305
2001	1251	1133	0.9035	121	0.0965	1111	0.9123	140	0.0877	936	0.7164	318	0.2536
2002	1263	995	0.7878	268	0.2122	1012	0.8013	251	0.1987	815	0.6453	448	0.3517
2003	1272	1112	0.8712	160	0.1258	1108	0.8711	164	0.1289	951	0.7476	321	0.2521
2004	1119	1032	0.9223	87	0.0777	1031	0.9210	88	0.0780	981	0.8791	135	0.1206

表3 上場会社 非製造業収録継続全社の各種利益・損失 会社数

年	兼続収録 会社数	営業利益 会社数	営業利益 比率	営業損失 会社数	営業損失 比率	経常利益 会社数	経常利益 比率	経常損失 会社数	経常損失 比率	税引後 当期純利益 会社数	税引後 当期純利益 比率	税引後 当期純損失 会社数	税引後 当期純損失 比率
1980	398	388	0.9719	10	0.0251	371	0.9322	27	0.0678	379	0.9523	19	0.0477
1981	410	403	0.9829	7	0.0171	389	0.9488	21	0.0512	396	0.9659	14	0.0341
1982	418	406	0.9713	12	0.0287	398	0.9522	20	0.0478	401	0.9593	17	0.0407
1983	428	405	0.9463	23	0.0537	390	0.9112	38	0.0888	396	0.9252	32	0.0748
1984	440	422	0.9591	18	0.0409	414	0.9409	26	0.0591	417	0.9477	23	0.0523
1985	447	431	0.9709	13	0.0291	427	0.9553	20	0.0447	433	0.9687	14	0.0313
1986	465	450	0.9677	15	0.0323	447	0.9613	18	0.0387	446	0.9591	19	0.0409
1987	475	456	0.9600	19	0.0400	456	0.9600	19	0.0400	463	0.9747	12	0.0253
1988	509	498	0.9781	11	0.0216	491	0.9705	15	0.0295	492	0.9666	17	0.0331
1989	556	518	0.9856	8	0.0144	550	0.9892	6	0.0108	545	0.9802	11	0.0198
1990	603	598	0.9917	5	0.0083	597	0.9900	6	0.0100	598	0.9917	5	0.0083
1991	619	612	0.9887	7	0.0113	610	0.9855	9	0.0145	608	0.9822	11	0.0178
1992	642	626	0.9751	15	0.0234	618	0.9626	24	0.0371	617	0.9611	25	0.0389
1993	675	638	0.9452	37	0.0548	631	0.9348	44	0.0652	625	0.9259	50	0.0741
1994	721	668	0.9265	53	0.0735	661	0.9168	60	0.0832	654	0.9071	67	0.0929
1995	773	723	0.9353	50	0.0647	712	0.9211	61	0.0789	697	0.9017	76	0.0983
1996	809	767	0.9481	42	0.0519	765	0.9456	44	0.0541	747	0.9231	62	0.0766
1997	841	797	0.9477	44	0.0523	798	0.9489	43	0.0511	762	0.9061	79	0.0939
1998	881	818	0.9283	66	0.0747	816	0.9231	68	0.0769	760	0.8597	121	0.1373
1999	923	861	0.9328	62	0.0672	859	0.9307	64	0.0693	788	0.8537	135	0.1463
2000	970	918	0.9461	52	0.0536	919	0.9471	51	0.0526	820	0.8454	150	0.1546
2001	1006	942	0.9361	64	0.0636	943	0.9371	63	0.0626	782	0.7773	224	0.2227
2002	1021	948	0.9258	76	0.0742	958	0.9355	66	0.0645	801	0.7822	223	0.2178
2003	1010	967	0.9298	73	0.0722	974	0.9365	66	0.0635	819	0.8163	191	0.1837
2004	873	820	0.9393	53	0.0607	824	0.9439	49	0.0561	776	0.8889	97	0.1111

上の3つの表は、上場会社についての集計結果である。この表から、上場会社数は、ここ数年、非製造業において、大きく増加してきていることがわかる。1980年代の初めには、製造業の会社が3分の2を占めていたが、1990年代にはいると、非製造業の会社が徐々に増加して、2001年には、1000社を超えている。1980年と比較すると、ほぼ2.5倍になっている。これに対して、新興市場においては、以下の表のように、非製造業の会社が、1990年代の中頃以降、非常に勢いで増加していることがわかる。2003年には、製造業のほぼ倍の会社数となっている。このことは、わが国の産業構造が、非製造業の方向に変化してきていることを示しているということもできるであろう。

表4 新興市場 収録継続全社 各種利益・損失 会社数

年	非製造業 会社数	製造業 会社数	営業利益 比率	営業損失 比率	営業利益 会社数	営業損失 会社数	営業利益 比率	営業損失 比率	税引後 会社数	税引後 営業利益 比率	税引後 営業損失 比率	税引後 会社数	税引後 営業損失 比率
1987	13	11	0.8162	2	0.1538	11	0.8162	2	0.1538	12	0.9231	1	0.0769
1988	119	110	0.9211	9	0.0756	110	0.9211	9	0.0756	109	0.9160	10	0.0810
1989	162	153	0.9111	9	0.0556	151	0.9506	8	0.0191	151	0.9506	8	0.0191
1990	210	198	0.9129	12	0.0571	201	0.9571	9	0.0129	201	0.9711	6	0.0286
1991	211	232	0.9508	12	0.0192	235	0.9631	9	0.0369	236	0.9672	8	0.0328
1992	260	211	0.9269	19	0.0731	235	0.9038	25	0.0962	230	0.8816	30	0.1151
1993	301	257	0.8538	11	0.1162	253	0.8105	18	0.1595	218	0.8239	53	0.1761
1994	363	317	0.8733	15	0.1210	313	0.8623	50	0.1377	308	0.8185	51	0.1188
1995	412	399	0.9027	13	0.0973	389	0.8801	53	0.1199	383	0.8665	59	0.1335
1996	506	460	0.9091	15	0.0889	461	0.9170	12	0.0830	460	0.9091	16	0.0909
1997	561	515	0.9180	16	0.0820	511	0.9162	17	0.0838	498	0.8877	63	0.1123
1998	593	511	0.8617	82	0.1383	513	0.8651	80	0.1319	477	0.8011	116	0.1956
1999	670	562	0.8388	108	0.1612	561	0.8373	109	0.1627	508	0.7582	162	0.2118
2000	788	701	0.8896	87	0.1101	708	0.8985	80	0.1015	611	0.8173	111	0.1827
2001	892	779	0.8733	113	0.1267	777	0.8711	115	0.1289	671	0.7522	221	0.2178
2002	998	852	0.8337	166	0.1663	851	0.8357	161	0.1613	721	0.7221	277	0.2776
2003	1063	916	0.8617	147	0.1383	928	0.8730	135	0.1270	829	0.7799	231	0.2201
2004	733	655	0.8936	78	0.1061	656	0.8950	77	0.1050	621	0.8172	112	0.1528

表5 新興市場 製造業収録継続全社 各種利益・損失 会社数

年	非製造業 会社数	製造業 会社数	営業利益 比率	営業損失 比率	営業利益 会社数	営業損失 会社数	営業利益 比率	営業損失 比率	税引後 会社数	税引後 営業利益 比率	税引後 営業損失 比率	税引後 会社数	税引後 営業損失 比率
1987	9	7	0.7778	2	0.2222	7	0.7778	2	0.2222	8	0.8889	1	0.1111
1988	62	58	0.9355	1	0.0615	56	0.9032	6	0.0968	58	0.9355	1	0.0615
1989	85	78	0.9176	7	0.0821	79	0.9291	6	0.0706	79	0.9291	6	0.0706
1990	107	99	0.9252	8	0.0718	100	0.9316	7	0.0651	102	0.9533	5	0.0167
1991	122	115	0.9126	7	0.0571	116	0.9508	6	0.0192	114	0.9508	6	0.0192
1992	131	121	0.9237	10	0.0763	118	0.9008	13	0.0992	111	0.8702	17	0.1298
1993	147	125	0.8503	22	0.1197	122	0.8299	25	0.1701	120	0.8163	27	0.1837
1994	172	115	0.8130	27	0.1570	112	0.8256	30	0.1711	139	0.8081	32	0.1860
1995	201	186	0.9118	18	0.0882	178	0.8725	26	0.1275	175	0.8578	29	0.1122
1996	231	211	0.9131	19	0.0823	212	0.9177	19	0.0823	210	0.9091	21	0.0909
1997	247	223	0.9028	21	0.0972	221	0.9069	23	0.0931	218	0.8826	29	0.1171
1998	258	218	0.8150	10	0.1550	213	0.8256	15	0.1711	200	0.7752	58	0.2218
1999	273	220	0.8059	53	0.1911	218	0.7985	55	0.2015	203	0.7136	70	0.2561
2000	309	270	0.8738	39	0.1262	273	0.8835	36	0.1165	252	0.8155	57	0.1815
2001	326	281	0.8712	12	0.1288	283	0.8681	13	0.1319	241	0.7393	85	0.2607
2002	313	261	0.7697	78	0.2271	267	0.7781	76	0.2216	222	0.6172	121	0.3528
2003	356	298	0.8371	57	0.1601	303	0.8511	53	0.1189	266	0.7172	90	0.2528
2004	261	231	0.8861	28	0.1061	235	0.8902	29	0.1098	228	0.8636	36	0.1361

表6 新興市場 非製造業収録継続全社 各種利益・損失 会社数

年	継続収録 会社数	営業利益 会社数	営業利益 比率	営業損失 会社数	営業損失 比率	経常利益 会社数	経常利益 比率	経常損失 会社数	経常損失 比率	税引後 当期純利益 会社数	税引後 当期純利益 比率	税引後 当期純損失 会社数	税引後 当期純損失 比率
1987	1	1	1.0000	0	0.0000	1	1.0000	0	0.0000	1	1.0000	0	0.0000
1988	57	52	0.9123	5	0.0877	51	0.9171	3	0.0526	51	0.8917	6	0.1053
1989	77	75	0.9710	2	0.0260	75	0.9710	2	0.0260	75	0.9710	2	0.0260
1990	103	99	0.9612	4	0.0388	101	0.9806	2	0.0194	102	0.9903	1	0.0097
1991	122	117	0.9590	5	0.0410	119	0.9754	3	0.0246	120	0.9836	2	0.0164
1992	129	120	0.9302	9	0.0698	117	0.9070	12	0.0930	116	0.8992	13	0.1008
1993	154	132	0.8571	22	0.1429	131	0.8506	23	0.1494	128	0.8312	26	0.1688
1994	191	172	0.9005	18	0.0942	171	0.8953	20	0.1047	169	0.8848	22	0.1152
1995	238	213	0.8950	25	0.1050	211	0.8866	27	0.1134	208	0.8739	30	0.1261
1996	275	219	0.9055	26	0.0945	252	0.9164	23	0.0836	250	0.9091	25	0.0909
1997	311	292	0.9299	22	0.0701	290	0.9236	21	0.0661	280	0.8917	31	0.1083
1998	335	293	0.8716	42	0.1254	300	0.8955	35	0.1045	277	0.8269	58	0.1731
1999	397	312	0.8615	55	0.1385	343	0.8640	54	0.1360	305	0.7683	92	0.2317
2000	479	431	0.8998	18	0.1002	435	0.9081	44	0.0919	392	0.8181	87	0.1816
2001	566	495	0.8716	71	0.1254	491	0.8728	72	0.1272	430	0.7597	136	0.2403
2002	655	568	0.8672	87	0.1328	567	0.8656	88	0.1344	499	0.7618	156	0.2382
2003	707	618	0.8711	89	0.1259	625	0.8840	82	0.1160	563	0.7963	144	0.2037
2004	469	421	0.8977	18	0.1023	421	0.8977	18	0.1023	393	0.8380	76	0.1620

この集計結果から、とくに目を引くのは、税引後当期純損失の会社数が、2000年頃から、異様に増加することである。上場会社の製造業においては、1998年から急激に増える。他のグループは、2001年を中心に、増加している。上場会社の製造業においては、他のグループに比べ、一足早く、体質改善のための行動を開始しているとみることができる。上場会社の製造業において、税引後当期純損失の会社数が最も多くなるのは、2002年であり、全体の35%にもなる。3社に1社以上が、税引後当期純損失に陥っているという異常事態である。新興市場の製造業においても、2002年については、事態は同じで、3社に1社以上が、税引後当期純損失に陥っていた。非製造業においても、上場会社、新興市場にあって、4社に1社程度は、税引後当期純損失に陥っている。このように、製造業と非製造業、上場会社と新興市場とでは、少し時間差が存在するけれども、2000年頃から、わが国企業は、その体質を急激に変更するための行動をとってきているとみなすことができるであろう。この行動は、2004年には一段落し、それまでとは異なったレールに乗り初めているようにみえる。それは、営業損失、経常損失の会社数の割合が減少してきていることからもうかがえる。わが国企業が、本格的に利益獲得能力を回復するには、もう少し時間がかかり、これからのことになるであろうが、基本的な体力を付けてきているとみることができる。なお、全体的にみて、利益獲得能力の回復は、上場会社に比べて、新興市場社は、営業損失、経常損失の会社の割合がそれほど減少していないことから、少し遅れているようである。

営業損益と経常損益については、上場会社において、かつては、経常損失となる会社数の方が、営業損失となる会社数よりも多かったが、製造業では、この傾向は、1989年頃から変化してきており、非製造業においても、近年、ほぼ同じ程度か、むしろ経常損失の会

社数が少ないというようになってきている。新興市場の場合には、両者の損失会社数は、ほぼ同じである。上場会社とは、その体質が少し異なることを意味しているといえる。次節にみる利益額と合わせてみていくことによって、上場会社における資金調達方法の変化と上場会社と新興市場との資金調達方法の相違を示しているとみなすことができる。それは、かつて、わが国上場会社の多くが、資金調達源泉として、他人資本に頼る政策を採用してきたことによって、経常利益が営業利益よりも少なくなるということが生じていた。その結果として、営業損益がプラスで利益が生じていたとしても、経常損益においてはマイナスとなり損失が発生している会社が多くなったということになるであろう。資金調達政策がほぼ同じ状態であるならば、このように、営業損益と経常損益の集計データに変化は見られないことになる。新興市場においては、そのデータからだけでは、変化がみられないといえる。したがって、資金調達政策には、それほど大きな変化があるとは思えない状況にある。

利益額の変化とともに、集計した、従業員数を除く他の項目について、対象グループごとにまとめてグラフ化したものを、資料にまとめて示しておく。グラフは、それぞれ、集計値と平均値について、あらわしている。なお、実数値については、紙幅の制約上、これを割愛した。なお、従業員数の変化についてみている第7節以外は、以下、この図1～図8を参照されたい。

3. 各種利益額の変化と利益獲得の方策－利益率と利益獲得能力

利益額の集計値をみていく際には、十分に注意しなければならない。それは、先に見てきたように、利益を生じている会社と損失が発生している会社があり、集計すると、両者は相殺されることになり、集計値が損失になるケースも存在するというを理解しておかなければならない。さすがに、営業損益と経常損益については、集計値が損失になるということはなかったが、税引後当期純損益については、いくつかグループについて、次の各年に、損失となっている。それは、上場会社・継続全社の2002年、一部市場上場会社・継続全社の2002年、二部市場上場会社・継続全社の2002年と2003年、製造業・二部市場上場会社の1999年と2002年、非製造業・継続全社の2002年と一部市場上場会社の2002年、二部市場上場会社の2003年であり、新興市場・非製造業・継続全社の1999年である。この結果から、2002年の損失は、一部市場上場会社については、非製造業の損失発生会社、二部市場上場会社については、製造業の損失発生会社によっていることがわかる。また、2003年については、非製造業の二部市場上場会社の集計値が損失となっているが、二部市場上場会社全体としては、利益となっている。製造業の二部市場上場会社の利益が、非製造業の損失をカバーしていることがわかる。1999年についても、同様の状況となっている。利益を生じている会社が獲得した利益額合計が、損失が発生した会社の損失額合計を超えて

いる。けれども、集計値が損失となっている状況は、先にみた、利益を生じている会社数と損失を発生している会社数（非製造業・一部市場上場会社 利益：491社、損失：135社；製造業・二部市場上場会社 利益：274社、損失：170社）からみて、損失額がいかにか大きかったかがわかるであろう。利益額も小さくなっているということが出来るが、平均値で見ると、損失額は、利益額の1.5倍から3倍以上に相当する。

売上高については、全体としてみるかぎり、上場会社においては、集計値は、1992年、平均値は、1991年に、一つのピークを迎える。この頃が、1980年以降の一貫した売上高の成長が頓挫している時期といえる。その後、1996年、1997年に下げ止まるが、それ以降、2001年に少し回復し、また減少、2004年に少し上昇している。一方、新興市場においては、平均値は、1992年にピークをみる事が出来る。集計値は、収録会社数の増加とともに、絶えず増加しているので、ここでは、平均値をみておく。売上高でみるかぎり、この1991年、1992年という時期を境に、上場会社では、その平均値は、遞減している。新興市場においても、1997年に少し上昇する以外は、2000年頃までは、遞減傾向にある。2001年に少し上昇し、それ以降下降を続け、2004年に少し回復するという、上場会社と同じような経過をたどっていることがわかる。

このような売上高の変化に対して、利益はどのように変化しているのだろうか。まず、グラフから明らかになることは、わが国企業の利益率は、1980年代、売上高が上昇するにつれて減少してきているが、それでも、1990年代以降に比べて、かなり高かったことがわかる。それは、営業損益、経常損益、税引後当期純損益のいずれについても当てはまる。1990年代は、利益率がかなり低い。これらの利益率が回復するのは、2001年以降と見なすことができる。これは、上場会社、新興市場、いずれにも当てはまる。したがって、わが国企業は、利益率からみて、1991年頃に行動の転換点を迎え、それ以降、2001年までに体質を変革することによって、それ以降、21世紀に入って、利益率を上昇させることができるようになってきたと見なすことができる。

それでは、利益率上昇と下降の原因は、何によるのだろうか。売上高営業利益率を上昇させるためには、売上原価率を下げることか、販売費・一般管理費率を下げなければならない。この利益率が下降しているのは、費用のどちらか、あるいは、両方が上昇しているためである。1980年代における利益率は、後に論じる設備投資の行動と相俟って、売上原価率の変化が主要な要因となって生じていると見なすことができる。ところが、1980年代後半には、販売費・一般管理費が上昇することによって、利益率は低下していく。売上高が増加しているにもかかわらず、利益額は減少する。この結果、1990年代に入って、売上高が減少すると、売上原価率も販売費一般管理費率も上昇し、利益率は大きく低下することになる。このことによって、わが国企業は種々の行動を開始することになる。そして、1990年代に実行した行動と政策の結果として、21世紀における新たな行動の方向が伺える

ようになる³⁾。経常損益の変化および税引後当期純損益の変化から、1990年代に採用された政策として、一つは、資金調達政策の変更、もう一つは、ヒトとモノにおけるリストラの実行を読みとることができる。ヒトのリストラについては、従業員数の変化についてみていく際に明らかになるが、モノのリストラについては、有形固定資産と税引後当期純損益の変化からみてとることができる。そして、資金調達政策の変化については、自己資本である資本合計と営業損益・事業損益・経常損益の変化から読みとることができる。

4. 資金調達方法の変化－他人資本（外部資金）と自己資本（内部資金）

まず、資金調達方法の変化についてであるが、営業損益と経常損益との差は、営業外収益と営業外費用の大きさによって決まる。営業外収益の大きさは、営業損益と事業損益（＝営業利益＋営業外収益）をみればわかる。したがって、営業外収益が営業外費用よりも大きければ、経常損益は営業損益よりも大きくなる。逆に、営業外費用が営業外収益よりも大きければ、経常損益は営業損益よりも小さくなる。営業外費用は、資金調達に伴う費用を含み、資金調達源泉として、外部資金を利用する場合には、大きくなることが多い。自己資本を含む内部資金を利用する場合には、小さくなる。そして、営業外収益は、余剰資金を含む資金運用の結果であり、外部資金によって調達した資金を用いて、運用されることもあった。

このような観点から、資金調達政策をみていくと、上場会社の場合、全体としてみると、営業損益が経常損益を上回っているが、その差は小さくなってきている。このことは、集計値においても、平均値においても同じ状況である。事業損益をみるかぎり、営業外収益は減少傾向にあるにもかかわらず、経常損益が営業損益に近づいているのは、営業外費用が減少していることに他ならない。この状況は、資本合計の増加からも明らかである。とくに、上場会社の製造業の場合、バブル期の資金運用の成果として、営業外収益が増加することによって生じた経常損益の増加が終わって、営業損益の逡減とともに、経常損益もそれ以上に減少するという状況を改善したのは、1996年である。それ以降、経常損益が営業損益を越えている。そして、資本合計は、増加していく。明らかに、必要な資金を内部資金によって調達する方向に政策転換がなされていることがわかる。それに対して、非製造業の場合は、自己資本である資本合計はほとんど増加しておらず、営業損益が経常損益を越えているが、その差は小さくなってきていることわかる。差が小さくなっているのは、2000年頃からであるので、一部は、金利の低下による結果であると見なすこともできる。けれども、基本的な方向として、営業外費用を逡減させる方策を採用してきていることは、事業損益の変化からも伺えるところである。上場会社にあっては、製造業、非製造業ともに、資金調達政策として、外部資金から内部資金による資金調達に政策を変更してきており、それは、製造業は、1996年頃から、非製造業にあっては、2000年頃からであるといえ

る。

新興市場の場合には、製造業にあっては、上場会社とほぼ同じ頃に、また、非製造業の場合には、上場会社よりも早く、1997年頃から、政策転換がなされてきている。

このように、わが国企業は、全体としてみるかぎり、資金調達源泉を外部資金、他人資本から、内部資金、自己資本に移すという政策を、製造業の場合には、1996年頃から明確にし、非製造業の場合には、それより少し遅れて、実行に移しているとみなすことができる。この方向は、それ以降、一貫しているようにみえる。

5. 資産と売上高の変化－投資とその回収、そして、行動の効率

かつて、わが国企業の一つの特徴として、薄利多売ということがいわれていた。実際に、1980年代においては、資産合計、すなわち投資額と売上高の比率、回転期間は1年以下であり、回転率は1以上であった。わが国企業は、回転率を高めることによって、利益を獲得してきていたとみなすことができる。ところが、この回転率が低下し続ける。上場会社全体でみると、1994年に、回転率は1以下となる。製造業では、すでに、1990年に1以下となっているが、非製造業では、それは、2001年以降のことである。製造業と非製造業で、また、一部市場上場会社と二部市場上場会社とでは、少し時期的に相違がみられるところであるが、製造業では、1990年以降、非製造業では、2001年以降、投資が先行し、その結果として売上高がのびていくという状況になっている。薄利多売型から、付加価値型への行動の転換とみることができる。

また、新興市場においては、製造業では、1991年頃に、回転率が1以下になっているが、上場会社ほど大きく低下していない。ところが、非製造業においては、1992年頃までは、回転率が1以下の状態であったが、それ以降、回転率が1以上に上昇し、効率を求める行動を採用している。これは、上場会社の場合とまったく異なる行動である。

新興市場の非製造業の場合を除いて、わが国企業の基本的な行動は、売上高先行型から投資先行型に、薄利多売型から付加価値型へと移行してきていることがわかる。その結果、2001年以降の利益の回復基調が生まれてきており、売上高が減少しているにもかかわらず、継続して利益を獲得する能力を維持できるようになってきているといえる。新興市場の非製造業の場合にも、売上高が先行しているが、2001年以降、投資額の増加が売上高を増加させ、それに伴って利益が増加するという循環を生み出すことに成功しているようである。

この側面からみた行動の転換点は、1991年であり、2001年であるといえるであろう。

6. 設備投資と設備廃棄－モノのリストラ

有形固定資産の集計値は、上場会社の場合、製造業では、1993年にピークを迎える。それ以降減少し、もう一度増加しているのは、1999年であるが、それを過ぎると、再度、減

少している。非製造業の場合には、1999年頃にピークとなり、製造業の後のピークに重なる。平均値でみると、製造業では、1993年をピークとして、それ以降は、減少を続けており、2004年まで増加することはない。それに対して、非製造業の場合には、1987年に最初のピーク、それ以降、1990年までの逡減を経て、1997年まで増加、それ以降減少し、2004年に増加している。なお、一部市場上場会社の場合には、製造業、非製造業ともに、1994年をピークとして、減少に転じている。一部市場上場会社の場合とは少し異なる行動がみられる。

新興市場にあつては、製造業の場合には、1993年以降、減少しており、非製造業の場合には、逡減傾向は続いており、2002年以降、増加に転じている。

このように、製造業の場合には、モノのリストラは、1993年頃から始まる。非製造業の場合には、少し遅れて1998年頃になるが、このリストラによって、身軽になり、売上高の変化に対して、利益を確保することができるようになってきている。さらに、ヒトのリストラが加わることによって、わが国企業は、21世紀に、ようやくテイク・オフできる状況となった。このモノのリストラによって、特別損失が増加し、結果として、税引後当期純損益が損失になるという年も生じていることがわかる。設備廃棄が、わが国企業の行動において、重要な役割を果たしてきていることが明らかになっている。

なお、このような設備投資の資金需要を、製造業においては、上場会社、新興市場ともに、必要な資金を自己資本でまかなうことができる状況にあるが、非製造業の上場会社の場合には、いまだ他人資本、外部資金に頼らざるをえない状況にあり、そのことが、営業損益が経常損益よりも大きくなっているという、一つの原因であろう。投資行動と資金調達政策についての、製造業と非製造業の差異を示している。新興市場の非製造業の場合には、1990年から自己資本によって設備投資の資金需要をまかなえるという状態になっており、その結果、営業損益と経常損益に大きな差はない。

7. 従業員数の変化－ヒトのリストラ

モノのリストラが進展する一方で、わが国企業は、ヒトのリストラも進めてきている。上場会社の場合、図9から明らかなように、製造業の場合には、1993年をピークとして、従業員数は減少に転じ、増加することはないのに対して、非製造業の場合には、1995年以降、しばらくはそれほど急激な減少はみられないが、2000年に大きく減少し、それ以降、そのままに推移している。リストラの方法が異なり、製造業から非製造業への移行も伺うことができる。従業員数全体からみると、製造業の占める割合が大きく、また、一部市場上場会社の割合が圧倒的に大きいことがわかる。その結果、一部市場上場会社の従業員数の変化については、全体に現れてきていないが、一部市場上場会社にあつては、製造業の場合には、1998年をピークとして減少に転じており、非製造業の場合には、従業員数は増

加を続けている。非製造業においては、リストラを実行するよりも、雇用を増加し、失業者数の減少に貢献していることになる。製造業の場合にも、リストラの開始時期は遅くなっている。

新興市場においても同じように、製造業では、2001年をピークに減少に転じているが、非製造業では、ずっと増加している。二部市場上場会社の非製造業および新興市場の非製造業は、雇用の受け皿として、重要な役割を果たしていることとなる。

ヒトのリストラとモノのリストラ、この両輪が、わが国製造業の再生に欠かせなかったことが明らかになっている。両者のリストラの開始時期は、全体でみるかぎり、ほぼ同じ時期に始まっているように見える。ところが、もう少し詳しくみていくと、一部市場上場会社の場合と二部市場上場会社の場合とは異なっていることがわかる。また、製造業と非製造業では異なる。新興市場と二部市場上場会社とは、その行動にそれほど大きな差はない。

一部市場上場会社の製造業の場合、1994年からヒトのリストラが始まっているが、これは、モノのリストラと同じ開始時期となる。ヒトのリストラとモノのリストラを同時に開始している。それに対して、非製造業の場合には、ヒトのリストラは1995年からであり、モノのリストラは1998年以降である。まず、ヒトのリストラから始められたことになる。ところが、二部市場上場会社においては、非製造業にあっては、新興市場とともに、ヒトのリストラは実行していない。製造業の二部市場上場会社では、ヒトのリストラは、1999年以降、新興市場、2002年以降であり、いずれも、モノのリストラの開始時期よりも遅くなっている。これらの会社では、モノのリストラが最初に実行されている。

このように、業種および会社の規模によって、モノのリストラとヒトのリストラの実行と開始時期について、異なる結果が明らかになっている。わが国企業においては、ヒトとモノのリストラが、重要な役割を果たしていることは明らかであるが、その実施の時期については、それぞれに異なる。

8. むすびに代えて

以上、1980年以降、わが国企業が、その行動をどのように変化させてきているのかを、以下の6つの側面から明らかにしてきた。それは、1. 利益を生じている会社と損失を発生している会社の会社数を集計することによって、上場会社と新興市場について、全体としての会社の利益獲得能力を調べる。2. 各種利益額を集計し、それぞれの利益の獲得方を調べる。3. 利益の獲得能力の分析から、資金調達方法の変化を探る。4. 資産と売上高の変化から、投資とその回収行動およびその行動の効率について調べる。5. 設備投資と設備廃棄のあり方を、有形固定資産の変化から探る。モノのリストラがいつ、どの程度、生じているのか。6. 従業員数の変化を探る。ヒトのリストラが、いつ、どの程度で

あるか。ヒトとモノのリストラは、どちらが先に発生しているか、である。

集計値および平均値から、わが国企業の行動をみていくとき、この6つの側面から、その行動が変化していることが明らかになった。その変化の時期にもとづいて、全体として、行動を変革している時期を特定すると、1980年以降、わが国企業の行動は、三つの時期に分けてみていくことが適切ではないかと考えられる。成長期としてとらえることができる1980年～1990年、バブルの終焉以降、体質改善に取り組んだ、1991年～2000年、そして、新たな出発を試みている2001年以降、この三つの時期は、それぞれに異なる行動を示している時期でもある。また、二つに区分するとすれば、1980年～1994年と1995年以降ということになるであろう。製造業と非製造業、一部市場上場会社と二部市場上場会社、新興市場会社によって、いくつかの側面で、相違がみられることは上に説明したとおりであるが、全体として、わが国企業の行動をみていく場合には、このような区分は、適切ではないかと思われる。

今後も、このような集計データにもとづく分析を進めていくことによって、パネル・データによる企業行動分析を補完していければと考えている。

* 本稿は、平成18年度科学研究費補助金（基盤研究（B）課題番号 17330058）の研究成果を利用している。なお、本稿で利用したデータの作成と処理については、奈良大学大学院社会学研究科 研究生 船越弘子氏の助力を得た。ここに記して、感謝の意を表しておきたい。

注：

1) 集計した項目は、以下の25項目である。

流動資産合計、固定資産合計、有形固定資産合計、投資その他の資産合計、資産合計、負債合計（Ⅱ特定引当金を除く）、流動負債合計、固定負債合計（Ⅲ特定引当金を除く）、社債合計（1年以内償還を含む）、長期借入金合計（1年以内返済を含む）、資本合計（Ⅱ特定引当金を含む）、売上高、売上原価+物品税等、販売費・一般管理費、費用総額、営業損益、営業外収益、事業損益、営業外費用、経常損益、税引前当期純損益、税引前当期純損益、特別利益、特別損失、期末従業員数

なお、この集計については、拙稿「新興市場企業の営業損益をめぐる行動分析—動的パネル分析の基礎としての個別決算集計データに見るその姿—」、『奈良大学紀要』（奈良大学）、第34号（平成18年3月）、127ページ以下も参照されたい。

集計データにもとづく分析およびパネル・データ分析については、さしあたり、次の論考を参照されたい。拙稿「日本の会社は強かったのか？—検証：株式会社『日本』—」、『経営情報研究』（摂南大学経営情報学部）、第3巻 第1号（平成7年7月）、pp.73～98、同「日本の会社：金利コストの分析—検証：株式会社『日本』—」、『経営情報研究』（摂南大学経営情報学部）、第3巻 第1号（平成7年7月）、pp.99～115、同「金融機関の株式所有状況と融資動向の分析：生命保険会社を中心として—検証：株式会社『日本』—」、『奈良大学情報処理センター年報』（奈良大学情報処理センター）、第6号（平成7年11月）、pp.49～72、同「日本の会社：資金調達—検証：株式会社『日本』—」、『経営情報研究』（摂南大学経営情報学部）、第3巻 第2号（平成8年2月）、pp.15～

62、同「金融機関の融資動向の分析－検証：株式会社『日本』－」『経営情報研究』（摂南大学経営情報学部）、第3巻 第2号（平成8年2月）、pp.63～81、同「日本の製造業：付加価値の生産－検証：株式会社『日本』－」『経営情報研究』（摂南大学経営情報学部）、第4巻 第1号（平成8年7月）、pp.1～46、同「日本の製造業：空洞化の実態－検証：株式会社『日本』－」『経営情報研究』（摂南大学経営情報学部）、第4巻 第1号（平成8年7月）、pp.79～118、同「日本の製造業：労働生産性の二変量変化分析－検証：株式会社『日本』－」『奈良大学情報処理センター年報』（奈良大学情報処理センター）、第7号（平成8年10月）、pp.43～65、同「日本の製造業：資本生産性とその二変量変化分析－検証：株式会社『日本』－」『経営情報研究』（摂南大学経営情報学部）、第4巻 第2号（平成9年2月）、pp.1～56、同「日本の製造業：空洞化とOEM効果－検証：株式会社『日本』－」『経営情報研究』（摂南大学経営情報学部）、第4巻 第2号（平成9年2月）、pp.65～147、同「日・米・加製造業の収益力比較－検証：株式会社『日本』－」『経営情報研究』（摂南大学経営情報学部）、第5巻 第1号（平成9年7月）、pp.31～84、同「日・米・加非製造業の収益力比較－検証：株式会社『日本』－」『奈良大学情報処理センター年報』（奈良大学情報処理センター）、第8号（平成9年9月）、pp.45～74、同「企業集団の収益力－検証：株式会社『日本』－」『経営情報研究』（摂南大学経営情報学部）、第5巻 第2号（平成10年2月）、pp.51～89、同「日・米・加一般機械産業の収益力比較と奈良県上場企業－検証：株式会社『日本』－」『奈良大学研究所報』（奈良大学総合研究所）、第6号（平成10年3月）、pp.47～95、同「日・米・加製造業・非製造業における自己資本経常利益率規定要因の解明－集計データにもとづく企業財務分析－〈検証：株式会社『日本』〉」『ファイナンス研究センターリサーチペーパーシリーズ』（立命館大学ファイナンス研究センター）第98005号、平成11年3月、pp.1～104、同「日本の製造業：OEM化のメカニズムとその影響－検証：株式会社『日本』」『奈良大学紀要』（奈良大学）、第28号、平成12年3月、pp.185～206、同「OEMと雇用の流動化－検証：株式会社『日本』」『奈良大学情報処理センター年報』、第10号、平成11年9月、pp.55～79、同「戦略的要因としてのOEM化：市場と組織」『立命館経済学』（立命館大学経済学会）、第49巻 第2号、平成12年6月、pp.17～54、同「OEM化のメカニズム：企業規模と市場、組織」『ファイナンス研究センターリサーチペーパーシリーズ』（立命館大学ファイナンス研究センター）、第01-006号、平成13年12月、pp.1～37、同「産業（業種）別OEM化のメカニズム：パネルデータによる先決性の検定」『立命館経済学』（立命館大学経済学会）、第50巻 第6号、平成14年2月、pp.15～52。

2) この点については、上掲拙稿、127-147ページも参照されたい。

資 料









